

「命の大切さ実感尺度」の開発について

1 尺度開発の目的

児童生徒が命の大切さをどの程度実感しているか、そして命の大切さを実感させる教育実践を行ったときに、その効果によって児童生徒の命の大切さの実感がどの程度高まったかを知ることが、児童生徒理解と対応、教育プログラム等の効果測定と今後の実践計画の設定などに、たいへん有用かつ重要である。

命の大切さを実感している程度を知るには、児童生徒の行動観察、児童生徒との日常会話や教育相談、保護者面談等のなかで教師の鋭い観察力を働かせて知ることが重要である。もう一つの方法として、質問紙（アンケート）の利用がある。これは、全児童生徒の客観的なデータを比較的効率よく得る方法である。

ところで、命の大切さを実感するには、さまざまな状況や方法が考えられるが、日々の生活が楽しく、充実していることが、そのためのひとつの要素である。また逆に、命の大切さを実感することが、日々の生活における生きる喜びを感じる源泉ともなるであろう。そこで、児童生徒が命の大切さを実感している現状を把握し、命の大切さを実感させる教育実践の効果を測定するために、どの程度生きる喜びを感じているかを中心に測定する尺度を開発することにした。以下、その内容について紹介する。

2 尺度の開発過程

(1) 項目の設定

平成17年度に兵庫県教育委員会が発行した『命の大切さ』を実感させる教育への提言』の中の教育プログラムモデルとしての「生きる喜びの実体験」(p.17) および「子どもたちが実感する『生きる喜び』」の表(p.18)を基盤とし、この表に示された8つの領域について、それぞれ2項目ずつ、計16項目を設定した。加えて、命の大切さをどの程度実感しているかに関する2項目を加え、合計18項目から成る尺度を作成した。項目の設定にあたっては、「小学生用学校生活生きがい感尺度」(古川・大江・内藤・浅川 1993)など既存の学校生活適応感に関する尺度を参考にして、項目の原案を作成し、大学教員、県教育委員会の主任指導主事、および指導主事が相談して、ワーディングなどについて検討した。

各領域と項目は、表1(次ページ)の通りである。(各領域の意味と具体的内容については、上記、「子どもたちが実感する『生きる喜び』」の表を参照のこと。)

(2) 信頼性・妥当性の検討および標準化のための調査方法

目的 「命の大切さ実感尺度」(小学生版)の信頼性・妥当性を検討し、個々の児童の状態把握のための基準値を得る。

方法 調査対象者：兵庫県内A市の小学校9校の、4年生～6年生、総計2682名を調査対象とした。内訳は、4年生881名(男子451名、女子430名)、5年生867名(男子434名、女子421名、不明2名)、6年生934名(男子492名、女子442名)であった。なお、欠席者は分析から除外した。また、無記入の箇所については、分析ごとに該当するものを除外したので、以下の分析結果では、分析ごとにデータ数が若干異なっている。

質問紙：①「命の大切さ実感尺度」(小学生版：試作版)、②Q-U(図書文化社発行)、③小学生版QOL(日本SEL研究会、2005)、④学校生活生きがい感尺度(古川・大江・内藤・浅川 1993)。(今回は、①「命の大切さ実感尺度」の分析結果のみ報告する。)

手続：調査は、学級担任により、学級ごとに集団で行われた。なお、実施をお願いする担任教師には、実施手引を配付して、それにしたがって行うよう依頼した。データは、あらかじめ用意した表計算ソフトのファイルに、学級担任によって入力され、後に調査者によってデータチェックを行った。

表1 「命の大切さ実感尺度」の領域と項目

領域	項目
自己肯定感	1. あなたは、自分にいいところがあると思いますか
	2. あなたは、「よくやったなあ」と自分をほめることがありますか
自己有用感	3. あなたは、人の役に立つ活動をしていますか
	4. あなたは、お手伝いなどをしてほめられることがありますか
成就感・達成感	5. あなたは、何かに夢中になることがありますか
	6. あなたは、何かをやりとげたという体験をしていますか
連帯感	7. あなたは、友だちと心が一つにまとまったと感じることがありますか
	8. あなたは、友だちと同じ目的を持って活動することがありますか
自然・生命への畏敬の念	9. あなたは、自然のすばらしさにふれて感動することがありますか
	10. あなたは、命ってすばらしいと感動することがありますか
愛する・愛される喜び	11. あなたは、身近に何でも話せる人がいますか
	12. あなたは、家族との楽しい時間をすごしていますか
五感で感じる喜び	13. あなたは、ふだん、よく体を動かしていますか
	14. あなたは、おいしく食事をとっていますか
芸術に対する感動	15. あなたは、映画や音楽、美術作品などで、感動することがありますか
	16. あなたは、歌を歌ったり絵をかいたり、ダンスをしたりしていますか
(命の大切さ)	17. あなたは、命は大切なものだと思いますか
	18. あなたは、命を大切にしていますか

※領域名に関しては、スペースの関係で若干短縮したものがあ

(3) 調査結果

① 因子的妥当性と信頼性

本調査で用いた「命の大切さ実感尺度」の因子的妥当性を確認するため、探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。固有値の変動状況と因子の解釈可能性を考慮して、7因子解を採用した。その結果を表2に示す。

この結果より、8つの領域のうち、「自己肯定感」「成就感・達成感」、「連帯感」、「自然と生命への畏敬の念」、「芸術に関する感動」「人を愛する喜び・人に愛される喜び」の6領域、および「命の大切さ」については、よいまとまりを示した。「自己有用感」と「五感で感じる喜び」の一部(Q4とQ14)は「家族関係安定感」の因子に吸収され、残りは、活動の因子にまとまった(Q3とQ13)。このように、かなりの部分は、当初設定した因子を形成しているので、この尺度は、因子的にみて妥当性を有すると考えられる。

「内的整合性を示す α 係数に関しては、どれもさほど高くなく、ほとんどは.46～.68の値を示した。とはいえ、項目数が2項目と少ないので、 α 係数はあまり高くないことが予想される。したがって、これらの下位尺度は、ある程度の内的整合性を有すると考えられる。しかし、「五感で感じる喜び」に関するQ13とQ14の α 係数は.293と、非常に低かった。

以上のことから、本調査で作成した項目について、「自己肯定感」「成就感・達成感」、「連帯感」、「自然と生命への畏敬の念」、「芸術に関する感動」および「命の大切さ」の7領域については、そのまま下位尺度として問題ないと思われる。他の2つの下位尺度「自己有用感」と「五感で感じる喜び」については、因子分析の結果、明確な因子を構成せず、特に「五感で感じる喜び」の2項目については、 α 係数も非常に低かったので、項目についての検討が必要であると思われる。しかし、これは今後の課題として、ここでは、当初に設定した領域を下位尺度として、以下の分析を進める。

表2 「命の大切さ実感尺度」の因子分析結果 (因子負荷量: パターン行列)

質問項目	因子							
	1	2	3	4	5	6	7	8
Q12	.866	-.034	.003	-.029	.021	-.011	-.050	-.057
Q14	.460	.077	.018	.013	.005	-.016	-.005	-.001
Q 4	.372	-.096	-.080	.101	.060	.112	-.013	.191
Q11	.305	.053	.247	.030	-.088	-.034	.181	-.035
(家族関係安定感: $\alpha = .640$)								
Q18	.035	.776	-.113	.010	-.063	.057	.010	.065
Q17	-.043	.723	.112	.036	.048	-.042	-.062	-.051
(命の大切さ意識: $\alpha = .689$)								
Q 6	-.090	-.033	.610	.000	.059	.098	-.004	.050
Q 5	.067	.027	.527	.020	.037	-.031	-.076	-.068
(成就感・達成感: $\alpha = .460$)								
Q16	.012	.021	.022	.656	-.107	-.031	.040	.042
Q15	-.014	.050	-.011	.548	.237	.025	-.004	-.061
(芸術に関する感動: $\alpha = .590$)								
Q 9	-.024	-.116	.054	.093	.671	.039	-.060	.074
Q10	.077	.176	-.001	-.074	.637	-.046	.121	-.011
(自然と生命への畏敬の念: $\alpha = .663$)								
Q 2	-.009	-.011	.011	-.006	.019	.840	.042	-.124
Q 1	.029	.069	.073	-.005	-.035	.442	-.034	.269
(自己肯定感: $\alpha = .683$)								
Q 7	-.039	-.027	-.087	.019	.048	.059	.823	-.020
Q 8	-.007	-.044	.254	.034	-.044	-.054	.461	.056
(連帯感: $\alpha = .643$)								
Q 3	-.036	-.002	-.023	.023	.060	-.090	.000	.825
Q13	.072	.077	.142	-.125	-.052	.044	.093	.209
(活動: $\alpha = .419$)								

※なお、「自己有用感」に関するQ3とQ4の $\alpha = .512$ 、「愛する・愛される喜び」に関するQ11とQ12の $\alpha = .537$ 、「五感で感じる喜び」に関するQ13とQ14の $\alpha = .293$ であった。

表3 「命の大切さ実感尺度」の学年別と性別の平均値

学年	性別	肯定感	有用感	達成感	連帯感	畏敬念	安定感	五感体験	感動体験	命大切さ	合計
4年	男子	7.44	7.47	8.77	7.72	7.75	8.75	9.13	7.19	9.57	73.77
		(1.84)	(1.89)	(1.43)	(1.94)	(2.07)	(1.67)	(1.29)	(2.24)	(1.10)	(10.85)
4年	女子	7.44	8.06	8.62	8.23	8.30	9.19	9.09	8.56	9.70	77.18
		(1.65)	(1.51)	(1.40)	(1.61)	(1.61)	(1.36)	(1.16)	(1.53)	(.81)	(8.78)
5年	男子	7.52	7.65	8.81	7.88	7.76	8.88	9.23	7.05	9.72	74.50
		(1.73)	(1.57)	(1.28)	(1.64)	(1.87)	(1.49)	(1.16)	(2.17)	(.75)	(8.93)
5年	女子	7.19	7.94	8.68	8.03	8.11	8.89	8.93	8.40	9.72	75.90
		(1.74)	(1.52)	(1.38)	(1.70)	(1.69)	(1.48)	(1.28)	(1.66)	(.83)	(8.65)
6年	男子	6.95	7.05	8.73	7.73	7.47	8.46	8.94	6.80	9.39	71.50
		(1.74)	(1.66)	(1.29)	(1.67)	(1.86)	(1.55)	(1.27)	(2.01)	(1.15)	(9.05)
6年	女子	6.88	7.55	8.68	8.10	7.81	8.67	8.67	8.32	9.53	74.20
		(1.70)	(1.51)	(1.27)	(1.62)	(1.71)	(1.55)	(1.34)	(1.64)	(1.03)	(8.90)

※領域名に関しては、短縮して表現している。

② 項目分析（合計得点の算出）

尺度の合計得点に対する個々の項目の寄与の程度を検討するために IT 相関を算出したところ、.42～.66 であり、無相関検定の結果、すべて 1%水準で有意であった。また、全項目による α 係数は、.86 であった。したがって、これらの項目は、全体で児童の『命の大切さ』の実感を測定していると解釈し、以後、項目の合計得点を『命の大切さ』実感得点とする。

③ 平均値と標準偏差

合計点および各下位尺度の平均値と標準偏差を表 3 に示した。この表より、学年ごと、性別により、平均値に違いが見られる。これらは、統計的にも有意差があり、生きる喜び実感得点（合計点）についていえば、4 年生、5 年生に比べて 6 年生は平均値が低くなっている。また、どの学年でも、女子のほうが男子より平均値が高くなっている。

3 尺度の利用方法と基準

(1) 利用にあたって

本尺度を利用するにあたっての要点をいくつか述べる。

① 質問紙調査を実施する目的を明確にする

漫然と実施するのではなく、児童理解のため、学級経営に役立てるため、教育プログラムや授業の効果を確かめるため、などの目的を明確にしてから実施すべきである。

② 調査時期

目的によって異なるが、児童理解や学級経営のためには、各学期の初め、または 1 学期の終わりあたりが有効であると考えられる。プログラムや授業の効果を測定するには、その前後に実施して、結果を比較するとよいであろう。

③ 教示

- ・開始前に「この調査は、児童の皆さんが楽しい学校生活を送るために行い、成績には関係ないので、思ったままを教えてください」と伝える。
- ・わかりにくい言葉等があれば、手を挙げて先生に聞くように伝える。
- ・「質問を読んで、そんなことが『よくある』と思ったら『5』、時々あると思ったら『4』、…、全くないと思ったら『1』に○を付けてください」と伝え、答え方がわかっているか確認する。
- ・文章を読むことが難しい児童がいる場合は、教師が全体または個別に、各項目の文章を読む。

④ 結果の利用法

調査結果は、調査目的に沿って活用されなければならない。よりよい児童理解、学級経営をめざし、要観察の児童への観察や、対処を必ず行っていただきたい。

次に調査データの守秘についても配慮すべきである。個々の児童の回答した結果を本人に無断で保護者や他の教師、児童に教えることは、児童の教師への信頼を傷つけることになる。もちろん、匿名であっても学級全員に個別のデータを公表すべきではない。

また、本尺度で得られる結果は、完全に正確であるということはありません。どのような検査や尺度も必ず誤差を含むものである。したがって、結果を鵜呑みにするのではなく、教師の日常観察や面談などをつきあわせて、結果を解釈する必要がある。

⑤ 対処方法

対処方法としては、個々の児童に対する対処と、学級全体に対する対処に大別できる。個々の児童に対する対処としては、次のようなことが考えられる。例えば、「自己有用感」や「成就感・達成感」の低い児童には、その児童に合った役割や課題を与え、期待していることを伝え、できたら、評価しほめる。「人を愛する・人に愛される喜び」の低い児童には、日頃から声をかけたり、よく話を聞いてあげるなど、教師の日常的な児童への関わりへの配慮をする、などである。

また、学級全体に対する対処としては、この報告書で示されているような「命の大切さ」を実感させる授業実践を積極的に取り入れたり、構成的グループ・エンカウンターなどの体験的活動を取り入れるなどの方法がある。

(2) 結果の見方と基準

本調査で得られた結果から、この尺度を利用したときの結果の見方として、個々の児童の得点がかかなり高いことを示す「高得点」と、かなり低いことを示す「要観察」の目安を表4に掲載する。これらは、学年および性別ごとに示してある。平均値から1標準偏差（偏差値（T得点）でいえば40点と60点）を基準値にしているため、この値より極端な場合は、全体の人数の上位または下位、約15%に入ることが理論的に知られている。ここでは、たとえば「要観察」の基準値が5.8になる場合、5.0以下を要観察の範囲とするなど、厳しく設定してあるので、15%よりも少ない範囲に入る児童であると考えられる。

「要観察」値より低い場合には、その児童についての注意深い観察や、対処が求められるであろう。また、「高得点」の場合は、問題ないようであるが、例えば自尊感情を測定する得点も高すぎることも問題とされることがあるし、自分を必要以上によく見せようとする気持ちや、過度に理想主義的な気持ちが反映していることもあるので、こちらも注意が必要である。

また、今回は、基準値を算出するには十分な調査対象者が参加しているが、A市という一つの地域の結果であるため、全県または全国的にこの基準値を適用できるかには若干の疑問が残る。したがって、今後この尺度を利用する場合、これらの基準値は、一つの判断の目安と捉えるべきであろう。

表4 個々の児童の得点についての判断基準値（目安）

		肯定感	有用感	達成感	連帯感	畏敬念	安定感	五感体験	感動体験	命大切	合計
4年男子	高得点	10	10	10	10	10	10	10	10	10	85
	要観察	5	5	7	5	5	7	7	4	8	62
4年女子	高得点	9	10	10	10	10	10	10	10	10	86
	要観察	5	6	7	6	6	7	7	7	8	68
5年男子	高得点	10	10	10	10	10	10	10	10	10	84
	要観察	5	6	7	6	5	7	8	4	9	65
5年女子	高得点	9	10	10	10	10	10	10	10	10	85
	要観察	5	6	7	6	6	7	7	6	8	67
6年男子	高得点	9	9	10	10	10	10	10	9	10	81
	要観察	5	5	7	6	5	6	7	4	8	62
6年女子	高得点	9	9	10	10	10	10	10	10	10	84
	要観察	5	6	7	6	6	7	7	6	8	65

※高得点より高い得点は、児童が回答する得点としてはかなり高いことを示す（上位15%以下）。
要観察より低い場合には、逆に得点がかかなり低いことを示す（下位15%以下）。

4 引用文献

- ・兵庫県教育委員会 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言』 2006
- ・古川雅文・大江幸銅・内藤勇次・浅川潔司 「学校における児童の生きがい感尺度の構成」 兵庫教育大学研究紀要 13(第一分冊)、103-114. 1993
- ・日本SEL研究会（編）（2005）『「社会性と情動」の教育プログラム—小学校（中学年）編—』 2005